

ジャカランダ農場のカルロスさんから教わったこと。

～ その人生を振り返って ～



カルロスさん

改めてカルロスさんの人生を振り返ってみると、父、イザウチーノさんが遺した次の言葉。「迷わず進めば多くを成し遂げる」が、そこに深く息づいていることが分かる。実際にカルロスさんは、思ったことは迷わず、なんでもやってみる人だった。学生時代に兄と建設会社を設立し、勉強する機会に恵まれない地方の学生のための「農村学生の家」の創設。そしてコーヒーの有機栽培への挑戦。



カルロスさん夫婦

そんなカルロスさんに、ある日、私はアドバイスをもたらした。「好きな人ができたら、一緒に暮らさないさい。お金を貯めてからとか、あれこれ理由をつけて後回しにしてはいけません。まず、一緒に暮らさないさい」。後日、妻のシエッキニーヤさんに聞いたところ、カルロスさんはサンパウロ大学の工学部に在籍中の7月4日に入籍。当時は建設会社を立ち上げたばかりで収入も乏しく、1部屋の下宿に暮らしていた。台所は共同だったそうだ。

「どんなに貧しくとも、彼は常に夢を追いかけていました」と、シエッキニーヤさんは言う。私が思い描くカルロスさんのイメージは、お会いできたのがその晩年だったということもあり、いつも物静かで穏やかな紳士。でも、少年時代や青年期のカルロスさんは、どんな感じだったのだろう。今となっては想像してみるしかない。

カルロスさんが生まれたのは、1927年8月22日。父イザウチーノが開拓した「セーハ・ネグラ農場」の15人目の子どもとして生まれ、電気はないけれど、たくさん兄弟姉妹と、豊かな自然に囲まれて育った。やがてサンパウロで学び、建設技師としてアマゾンにいくつも橋を架け、福祉や教育活動に尽力。その後、農場を受け継ぎ、コーヒー

の有機栽培に挑戦し、遠く離れた日本人々からも愛されるコーヒーを生み出した。

そんなカルロスさんが、この世界に別れを告げたのは、2003年の7月4日。カルロスさん、シエッキニーヤさんにとっては結婚記念日となるその日の朝、「君と出会えて、本当にしあわせな人生だった。ありがとう」と最愛の妻に伝えたと、静かに息を引き取ったという。

勇気と、そして感謝か。しあわせな人生を送るために大切なこと。それはどんな時代であっても、そう変わらないシンプルなこと。今年もまたカルロスさんの命日が近づいてくるけれど、その度に、カルロスさんのことを思い出す。

